

キャリア教育支援データベースの構築と運用

The report about supporting system for Career Education.

坪倉 篤志^{*1}, 足立 元^{*1}, 伊藤 研^{*1}
Atsushi TSUBOKURA^{*1}, Hajimu ADACHI^{*1}, Ken ITO^{*1}

^{*1} 日本文理大学

^{*1} Nippon Bunri University

Email: tsubo@atlab.org

あらまし：本学科では全学での取組みに加え、学科独自に4年間を通じたキャリア教育に取り組んでいる。キャリア教育への取組みは学内の教職員に加え、学外の関連機関と連携して実施している。キャリア教育への学習者の取組みを包括的に記録し、学習者を指導・支援するスタッフで共有できるキャリア教育支援データベースを構築した。本報告では、これらの取組みと成果や問題点について報告する。

キーワード：キャリア教育、キャリア教育支援データベース、主体的活動能力

1. はじめに

大学への入学生のユニバーサル化に伴い、教職員は様々な学生に対する対応が求められている⁽¹⁻⁴⁾。近年、大学は就職内定率や就職企業等で評価される場合もあり、就職内定率の改善は非常に重要である。本学では以前より、全学で社会人基礎力の育成を目指した取組みを行って来た。しかし、2008年頃から工学部 情報メディア学科の就職内定率が低下し始めた(図1)。そのため、2010年中旬より、全学での取組みに加え、学科独自にキャリア教育プログラムの体系化と学生指導と支援体制の確立に取り組んできた^(7,8)。これらの取組みにおいて、学生のキャリア教育への取組みを包括的に記録するデータベースを構築し、学習者を指導する教授者支援システムとして運用している。

これらのシステムを用いて運用してきたが、多くの問題点と、これからの対応の必要性が幾つか見えてきた。本報告では、キャリア教育支援体制とキャリア教育支援データベース、今後の展開の方向性について報告する。

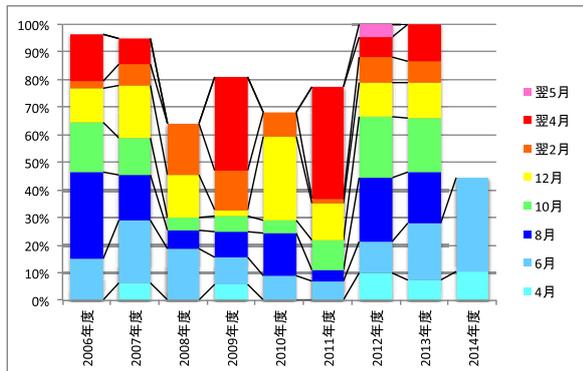


図1 就職内定率の推移(2007年度~2014年度)

2. キャリア教育支援データベース

キャリア教育プログラムは入学時から卒業までの4年間(48ヶ月)を体系立てたプログラムとして企画運営と年2回の見直しを行なっている。本プログラ

ムにて、学習者は多くの取組みを行なう。これら取組みに、学習者の特性や課題等の情報が含まれていると考えた。そこで、キャリア教育プログラムへの学習者の取組みの記録と、学習者を指導する教職員が用いるシステムとして構築した⁽⁸⁾。システムはMacOS X serverにてFileMakerPro 11を用い構築。学内でのみの利用に限定した。教職員は必要に応じてWebブラウザにてアクセスし、何時でも閲覧が可能にした。保存データは、キャリア教育プログラム対象授業の単位取得状況、各種試験結果、各種調査結果、面談記録、指導記録等である。画面上では、キャリア教育への取組みの全てを一覧で閲覧でき(図2)、問題点を捉えられるよう配色面のデザインルールを設定して設計している(赤:改善事項等)。

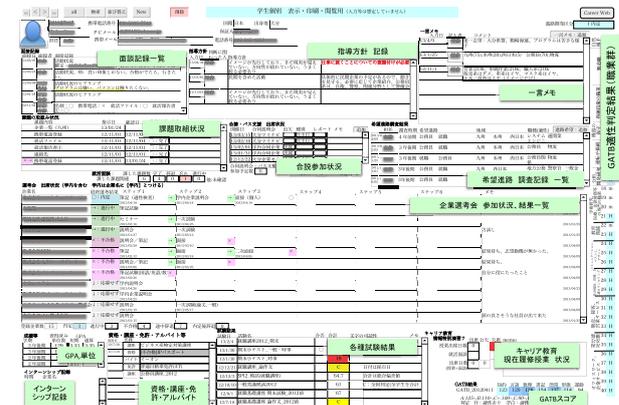


図2 キャリア教育支援DB 画面構成(一部)

教職員は、これらのデータを参考に、日常的な学生指導や年数回の学生面談、個人面談会(年1回 全国)、3年次の三者面談(担任、就職委員、本人 年3回)、4年次の個別就活面談(就職委員、本人 隔週で実施)に取り組む。また、改善項目が改善に至らない学習者に対しては、必要に応じて、学内外機関と連携して指導につなげている。

3. 学生を取り巻く支援体制

本学ではクラス担任制を実施しており、全学生に

対して担任を割り当てられている。キャリア教育プログラムでは、直接的な学生指導は担任が担当する。

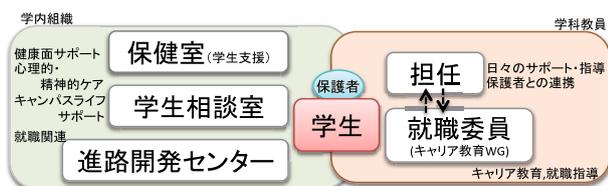


図3 学生を取り巻く支援体制

また学内の各種機関と連携し、学習者の教育支援の実施と共に、卒業後の進路に向けた対応と指導を行なっている(図3)。なお、保護者へは学期末の成績配布時に、キャリア教育への取り組み状況報告書として、取り組みの詳細について書面にて送付している。これにより、保護者への詳細の報告と共に、今後の学生指導に向けた検討に用いる基礎資料として用いている。



図4 学内外機関との連携

さらに様々な支援が必要な場合が多くある。そのため、学内外の各種機関と連携して学生対応に取り組んでいる。これらにより、全国各地の出身者に対し、各地域に合わせた保護者を含めた支援体制を組んでいる(図4)。

他に就職活動への準備期である3年生には、これまでのキャリア教育プログラムへの取り組み状況から、就職活動に向けて多くの課題がある学習者に対しては、カウンセラーによる面談、必要に応じて継続した面談や指導に取り組んでいる。また3年後半(3月頃)と4年中盤(8月)には、ハローワークやジョブカフェ、サポステと連携した就活相談会や職場体験等への勧奨を実施している。

4. 今後の展開

2010年度より記録してきたデータや学生対応から、幾つかの新たな取り組みの必要性が解ってきた。

4.1 学習者への対応記録の必要性

大学のユニバーサル化に伴い、社会に向けたキャリア教育において様々な課題を持つ学習者が在籍する。これらは日常のキャンパスライフに現れる些細な行動等に現れる場合が見られる⁽¹⁾。具体的には、テストやレポートにおける手書き文字、レポート内容、授業における質問内容(同じ質問を繰り返す)、授業への出席状況(遅刻、早退等)、授業への受講態度(睡眠学習、トイレに立つ等)、配布資料の保管・管理方法、課題への取り組み状況(提出忘れ・遅れ、不十分な取り組み、取り組んでいるが出せない)、簡単なアンケートへ取り組み時間(突出して早い・遅い)、各自の持つ課題に帯する改善傾向と課題としての認識状況等である。これら全ての記録は難しいが、目

につく部分だけでも記録の必要がある。これらは、学習者が持つ課題を把握し、今後の指導の方向性を考慮する上で非常に重要な情報となる。また、教職員による安易な学生に対する配慮は、学生が持つ課題への改善に向けた取り組みに対する阻害要因になる場合もある。

4.2 試行例

学習者の授業への取り組み状況の記録に向け次の試行を行なった。2013年度後期より、授業にて複数名の教員で担当する授業、またはTAやSAが授業補助に入る授業では、学生に対する対応記録として質問や授業への受講態度、さらには特に気になる学習者に対しては課題への取り組み状況(提出状況、授業内での課題への取り組み状況)等の詳細を記録し始めた。これらにより、学習者のもつ課題の把握や課題に対する改善取り組みの把握と改善に向けた基礎資料になればと考えている。

5. まとめ

今回、キャリア教育に取り組む教職員を支援するキャリア教育支援データベースと、学習者を支援する体制についてまとめた。これら取り組みから、新たな取り組みとして、日常的なキャンパスライフの記録として、授業への取り組み状況の記録の試行についてもまとめた。

今後、これらについて自動化やテンプレート化と、これらデータの支援システムの構築等が必要となると考えている。

参考文献

- (1) 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構職業能力開発総合大学 能力開発研究センター, "特別な配慮が必要な学生等への支援・対応ガイド", pp15, (2012)
- (2) 仲 律子, "大学における発達障害学生への支援についての一考察", 鈴鹿国際大学紀要 Campana 16, 71-87, (2010-03-20)
- (3) 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所, "発達障害のある学生支援ケースブック -支援の実際とポイント-", pp43-47, (平成19年3月)
- (4) 見館 好隆, "「いっしょに働きたくなる人」の育て方", プレジデント社, (2010)
- (5) 厚生労働省編 一般職業適性検査, 雇用問題研究会
- (6) 雇用問題研究会, "GATBを活用したキャリア形成支援", 職業研究 2012 夏号
- (7) 坪倉, 足立, 伊藤, "主体的PDCAプロセスを導入したキャリア教育の試み", 日本文理大学 紀要第41巻第2号, pp52-62, (2013, 9)
- (8) 坪倉, 足立, 伊藤, "キャリア教育支援データベースシステムの仮構築と仮運用", 日本文理大学紀要 第41巻第2号, pp52-62, (2013, 10)
- (9) 坪倉, 足立, 伊藤, "主体的活動能力の育成に注力したキャリア教育の実践", 教育システム情報学会第38回全国大会, pp343-344, (2013, 9)